

イギリス カントリー・ファニチャー「ウインザーチェア」 の形態分析研究 そのII

(ボウ・バック ウインザーチェア)

デザイン学科

山 永 耕 平

An Analytic Study of The English WINDSOR CHAIR Styles. II
(Bow-back WINDSOR CHAIR) by Kohei YAMANAGA

【はじめに】

ウインザーチェアをなんとかして作ってみたいという単純な動機から始まって、いろんな壁にぶつかり、試行錯誤をくりかえしつつも、ようやくそのいくつかのサンプルを作ることができるようになった。しかしただ単に作ることであればごく簡単であっても、歴史的価値のある現物に近い形態を把握するにはそれさうとうの努力が必要である。完璧にできたつもりでいても、その現物を1年間にわたって、ながめたり腰掛けたり、さわったりしているうちに、どうしても形態が一致しないところに気が付くようになる。それは微妙な食い違いによるものではあったが、気にしだすとどうしようもなく目だってくるものであった。そのことがある時点で、形態研究というテーマに取り組んでいることに気付く発端でもあった。一度CADに入力した図面を取り出しては検討を加え、一部を訂正していくうちに、根本的に見直さなければならなくなる。そうしなければ実際のウインザーチェアの形態に近づけないのである。さらに新しく図面を起こし、それをまた制作しなおす。そう言ったフィードバックする経験を積んで行くうちに、ウインザーチェアの形態がクラフトマンの知恵と、当時のマニュファクチュアールのために考えられたシンプルシティーの原理とも思えるものによって作られているという事実、実体験として触れることができた。同時にまた、

ますますウインザーチェアの持つ形態の魅力とでもいえる、微妙なものに触れることができたのである。その間ウインザーチェアのテーマを授業(デザイン研究, 卒業研究)に取り入れるなどして教育研究を進めてきた。それが前稿でふれたものであった。その形態把握のために費やした時間は膨大なもので、制作した部品の数や小道具類も今回の制作を合わせるとそれ相応の量にのぼる。大別すると3回の変遷をくりかえしたことになるが、それを今後の基礎資料としてまとめたのが今回の研究報告の主意である。

1. ウインザーチェアの典型的形態

ウインザーチェアを研究するにはいくつかの形態が考えられたが、なんと言ってもボウ・バックスタイルの形態を把握することがその鍵であるように思えた。アーム・ボウとバック・ボウをささえるスピンドルとアームサポートの構造を理解できたら他の形態の把握をも容易ならしめることは明らかであった。制作方法にあたってはジャック・ヒル氏の著書「カントリーファニチャー」より、そのボウ・バックチェアの作り方の項目のラフ図面(図1~5)をコンピューターを使用して図面におこし、それを制作したのが1992年である。

曲げの方法や木工ロクロの技術などウインザーチェアの制作にとって必見の重要な資料であり、貴重な体験となったが、イギリスのクラフトマンによって制作されたウインザーチェアだから歴

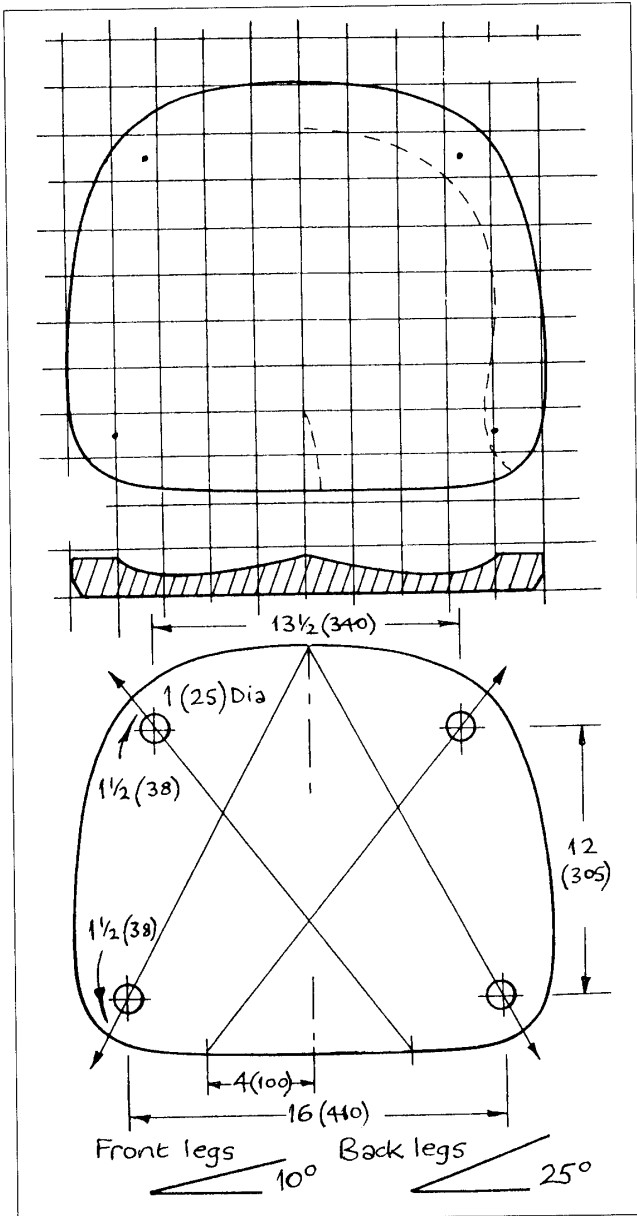


図1 ジャック・ヒル氏の図面 (座面と脚の位置)

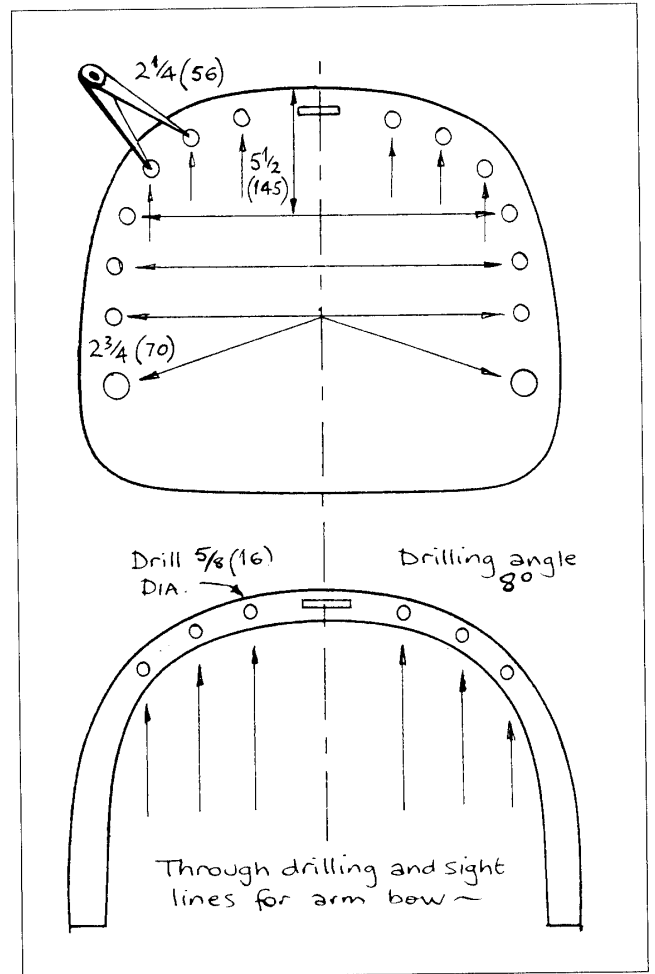


図2 ジャック・ヒル氏の図面 (座面とアームのバック・スティックの位置)

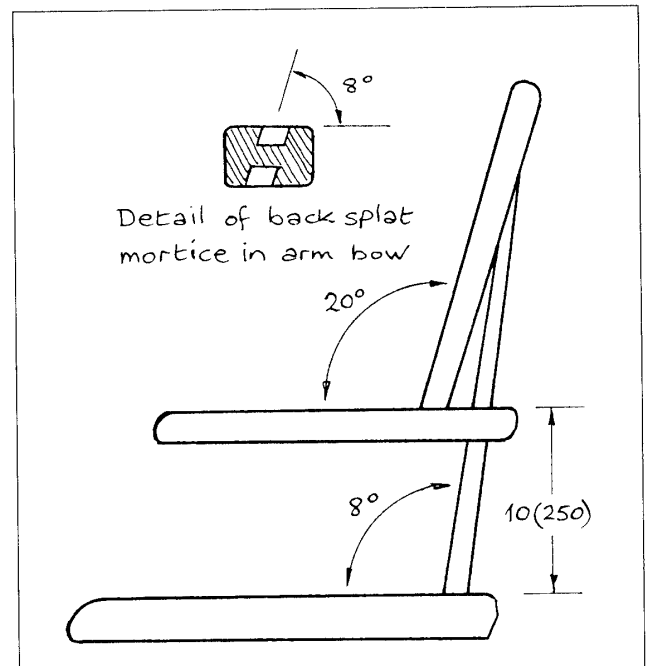


図3 ジャック・ヒル氏の図面 (上部構造側面)

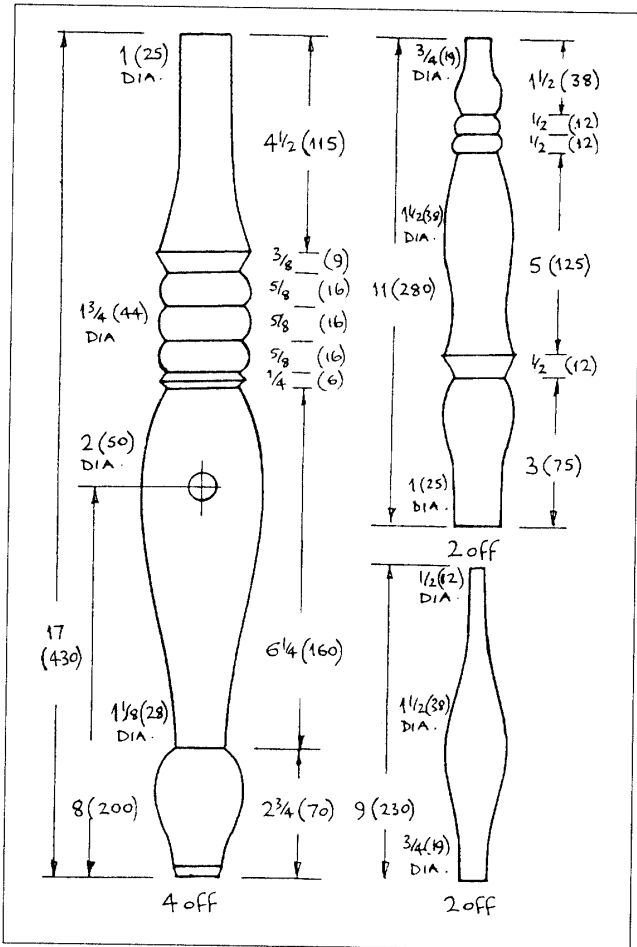


図 4 ジャック・ヒル氏の図面 (脚, アームサポート, スタブ・ストレッチャー)

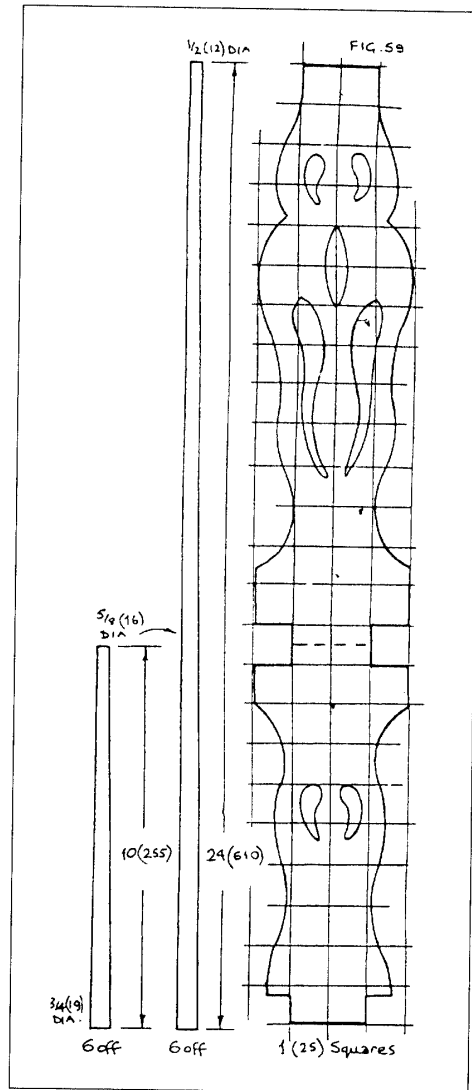


図 5 ジャック・ヒル氏の図面 (バック・スティック, スピンドル, スプラット)

史的に価値あるものとあまり変わらないはずと、うのみにしてとりかかったがために、実際の歴史的形態とはずいぶんことになって、作り安く簡略した形にアレンジされていることに気付いていなかった。後にトーマス・クリスピン著の The English Windsor Chair の120におよぶウインザーチェアの写真資料の中からボウ・バックアームチェアを選択し比較検討した結果、やはりずいぶんその形態の間に違いがあることが判明した。そこで19世紀半ばのロンドン郊外のハイウイカムに於いて、マンユファクチャーの生産がいちばん盛んであった時期のボウ・バックチェアをモデルに選んで、

制作したのが1993年度「卒業制作」のハイ・ボウバックチェアであった。Frederick Walker of Rockley, Nottinghamshire, のスタンプ印の付いた椅子で(前稿図19), その説明書きによると、ビーチ材を主に楡材のシートからなる椅子である。当時の一般家庭、クラブ、学校、パブなど数多く作られ、拡大しつつあった市場の需要に答えて安く生産することができた。すべてがシンプルにデザインされ、中でもスプラットはきわめてシンプルに形づくられ、アームサポートはシンプルな形にロクロで削られた。三つの輪をつけた形からなるロクロの脚は、マンユファクチャーに即して、経

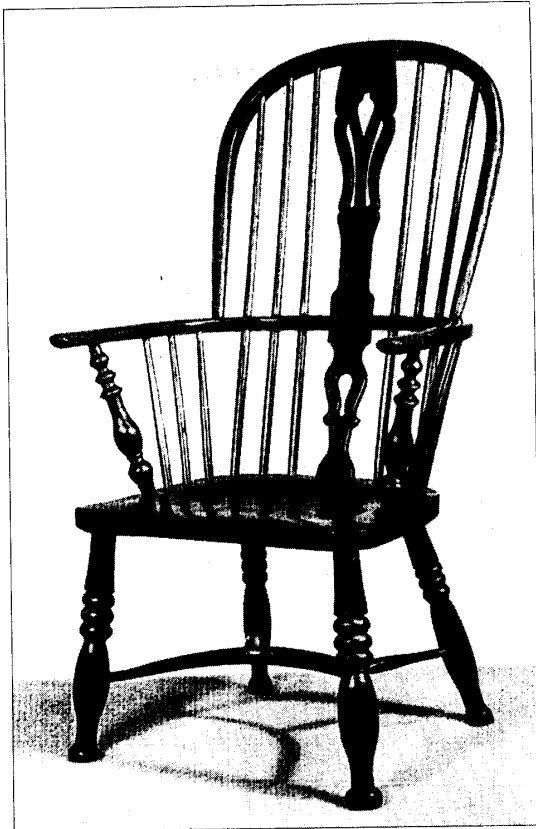


図6 ハイ・ボウ・バック チェア, The English WINDOR CHAIR p. 128

済的かつ早い生産に合うようにデザインされたところがある。これは写真のアングルの加減で非常にわかりにくい点もあって、他にいくつかの資料を選び合成して、当時の形に最も近い形態のウインザーチェアを本格的に制作して見ることにした。その一つ(図6)は脚の一部がカットされた同じ形の椅子で、違った角度から見たものである。座面の型は前稿の(図3)から抽出した。

2. ボウ・バック ウインザーチェアの図面

CADによる入力の手書きでは難しい角度や、アールを描くには最適ではあるが、やはりめんどうという点では手書きとなんら変わらない。最初部材の中心線による軸線図(図7)を正面、側面、平面の3面から正確に描き、(実は制作にはこの軸線図が最も重要な役割を持つのであって、のちの部品図、その他の原型となるものである。)3面図、原寸図はあとで肉付けしたものである。

3. ボウ・バック ウインザーチェアの形態分析

「最初にスピンドルの傾斜」

ジャックヒル氏の図面をベースに制作した最初の試作がどうしても歴史的資料のスタイルに照らして、似つかわしくないのは作り安く現代的な形にアレンジしてあるばかりではなく、スプラットの装飾が簡潔になっているのと、(図4参照)最も重要なポイントは、スピンドルと背の傾きが異常に立ちすぎていることによるものだ、ということに気づくにはさほど時間はかからなかった。しかしその傾斜が完璧なものになるにはいくつかの段階を踏む必要があった。(図11参照)

「後脚の傾きについて」

脚の角度「ころび」をきめるには同様にジャックヒル氏のラフ図面の角度が大変役にたったが、完成後ながめているうちに後ろ脚が異常に外側に傾斜しているのが気になりだした。事実、資料に基づき検討の結果どれにも該当するものがなく、内側にもどすことにして、適当な角度をきめ、その集中点をきめた結果、図13のようにある法則性があるかのように座面正面の一点に集中した。同時に両側スピンドルのころび方向も同じ一点に集中するという考えられないような一致が出現したのであった。

4. 座面の形態

ジャックヒル氏のラフ図面から制作した部品の中で最も食い違っていたのが座面の形態であった。(図14)それを図15のように変え、スピンドルとスティックの位置を後ろにずらしてみると、背の角度までが変ってきた。その延長上にあるアームやバックボウに連動していることが判明したのである。

「座面の凹面について」

サドル型座面の凹凸面の形状を資料より割り出すのは至難のわざである。いままで描いていたイメージの形状は、実際のウインザーのサドル形の形状とは異なる。試行錯誤しているうちに、アッズによる加工の資料図(前稿図16参照)から、そのア

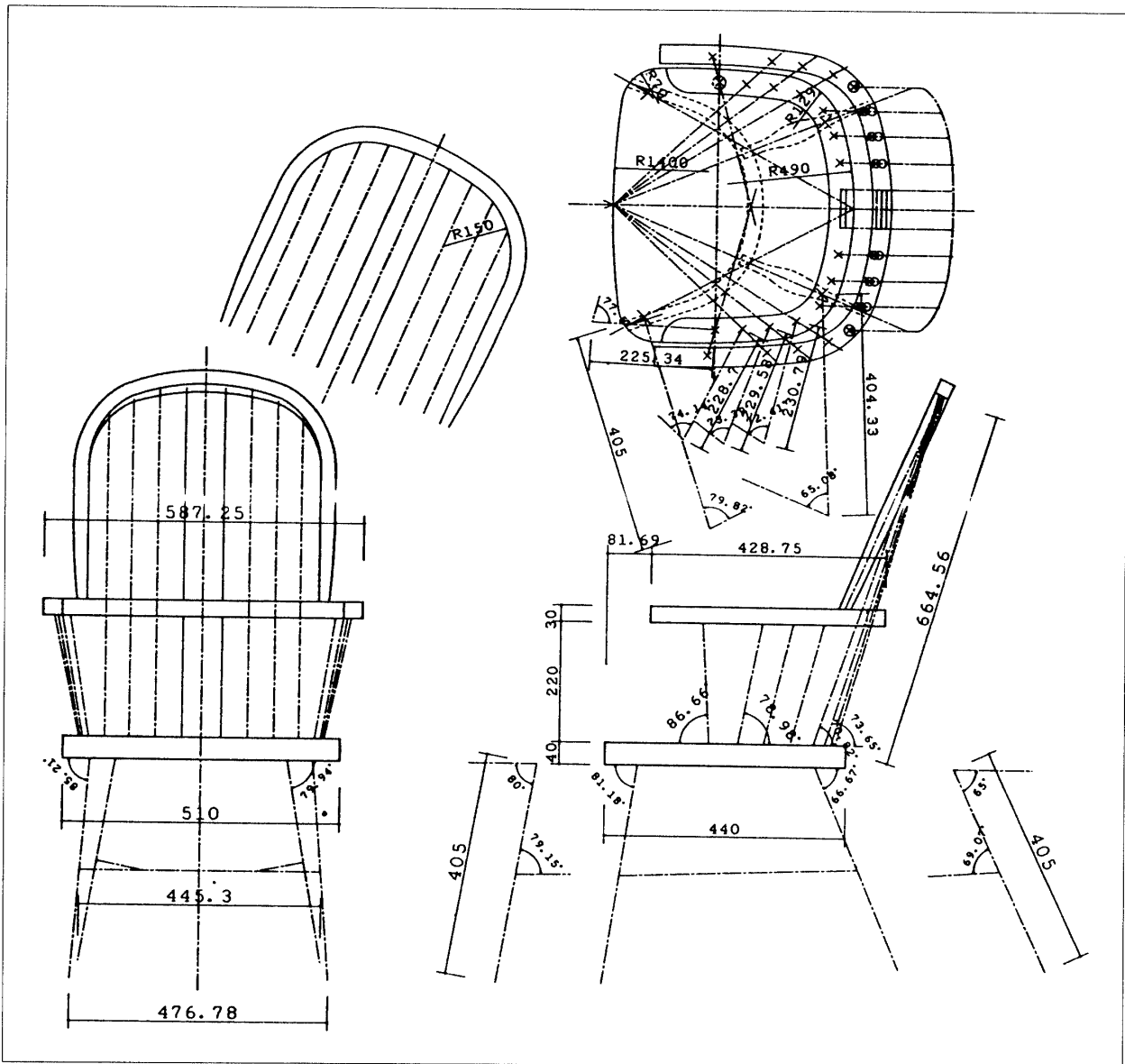


図7 軸線図

ールを尻の形にあった形状からだけではなく、ア
 ヅズを使用する姿勢から考えてみることにした。
 すると立ち姿勢で使用する腕と柄の軌跡をつくる
 手首を中心点にして半径を描く円弧による形状が、
 ちょうど資料の形態に合うことが発見できたので
 ある。(図17)

5. 脚の太さについて

最終的に脚が細いのに気付くにはずいぶん時間
 を要した。それはウインザーチェアのスタイル

がシンプルであるといういわば既成事実によるも
 ので、自分の視覚によって決められた脚の寸法は
 所詮繊細なものなのであった。径を大きくするこ
 とによって初めてウインザーの持つ落ちついて安
 心できる形態に近づけることができたのである。

(写真6と写真8を比較)

6. ボウ・バック ウインザーチェアの完成 歴史的資料写真との比較

写真2と3は1993年に制作したボウバックチェ

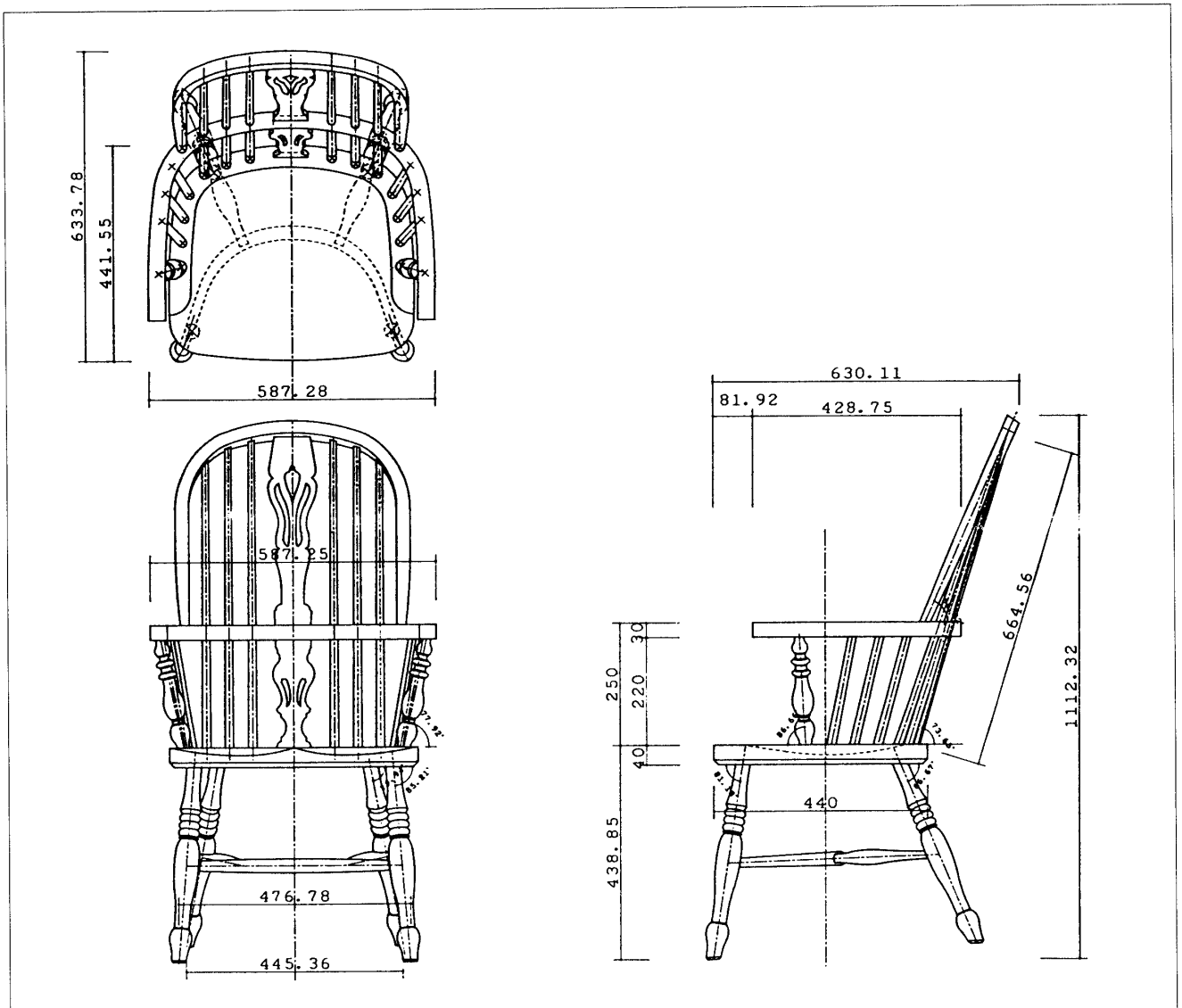


図8 三面図

アーの部品である。写真2は座の形態が後方に向かってテーパシ、かつ丸みをおびているのがよくわかる。

写真4と5は1994年度卒業制作のハイボウバックチェアの試作と本作の違いを比較したものである。

写真6, 写真7は歴史的資料の写真の角度で撮影したものである。前稿図21との比較で見れば、側面においては後ろ脚のコロビとスピンドル、とバックスティックの傾斜が不自然であるのが顕著である。

写真8, 9は完璧になったハイボウバックチェアを歴史的写真資料の角度で撮影したものである。

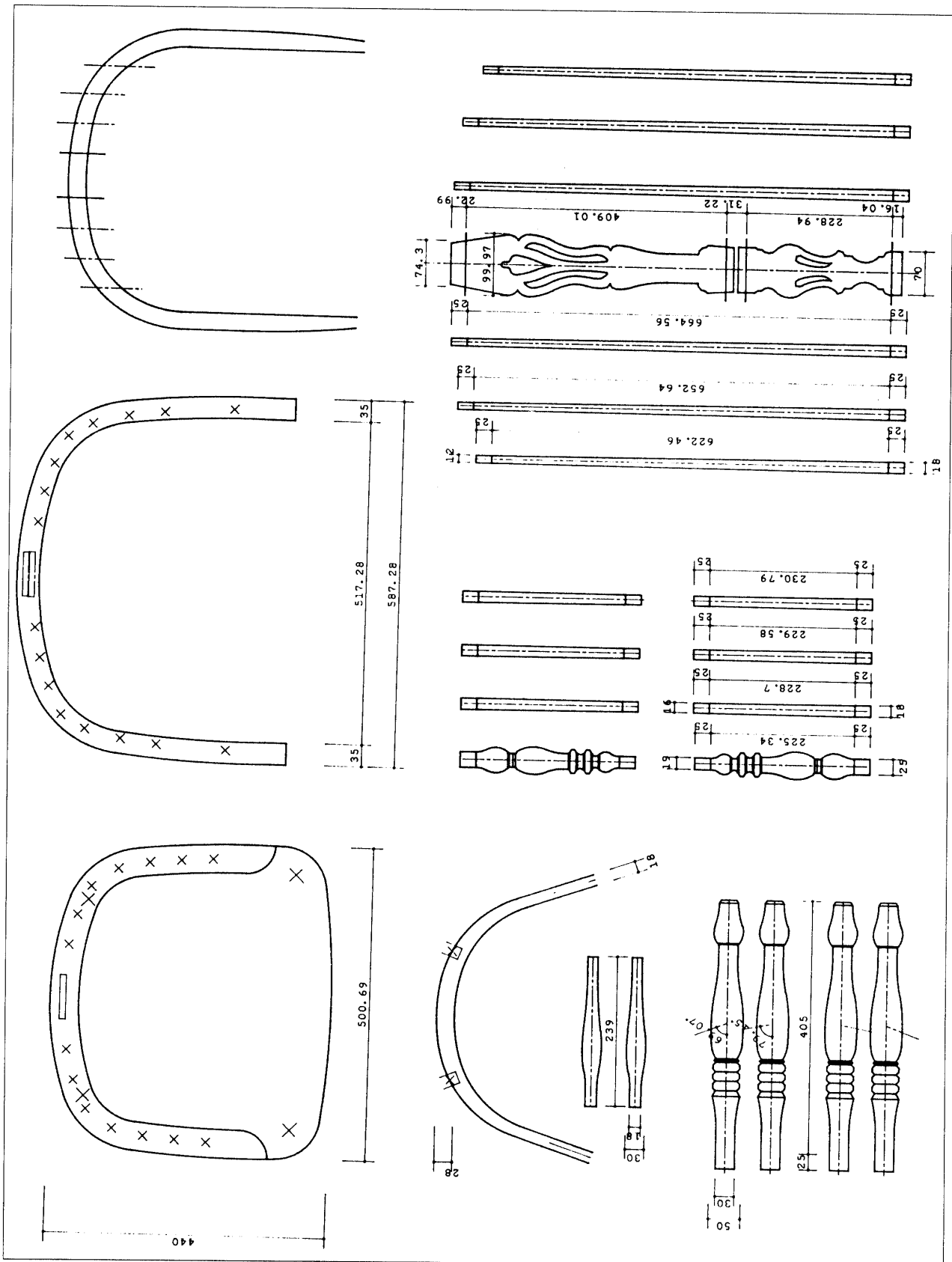


図9 部品図

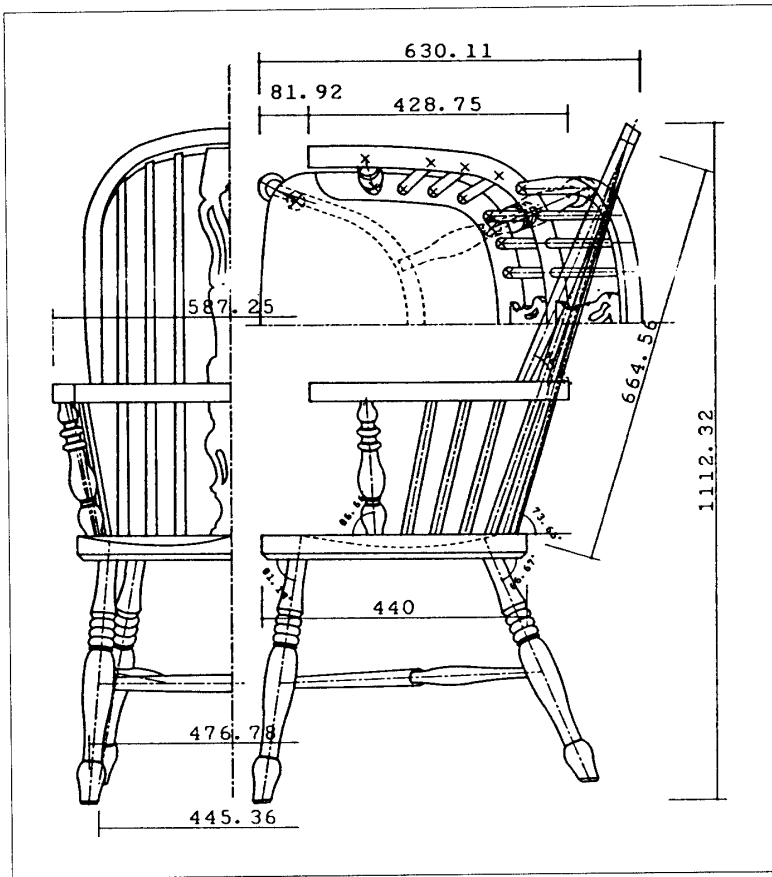


図10 原寸図

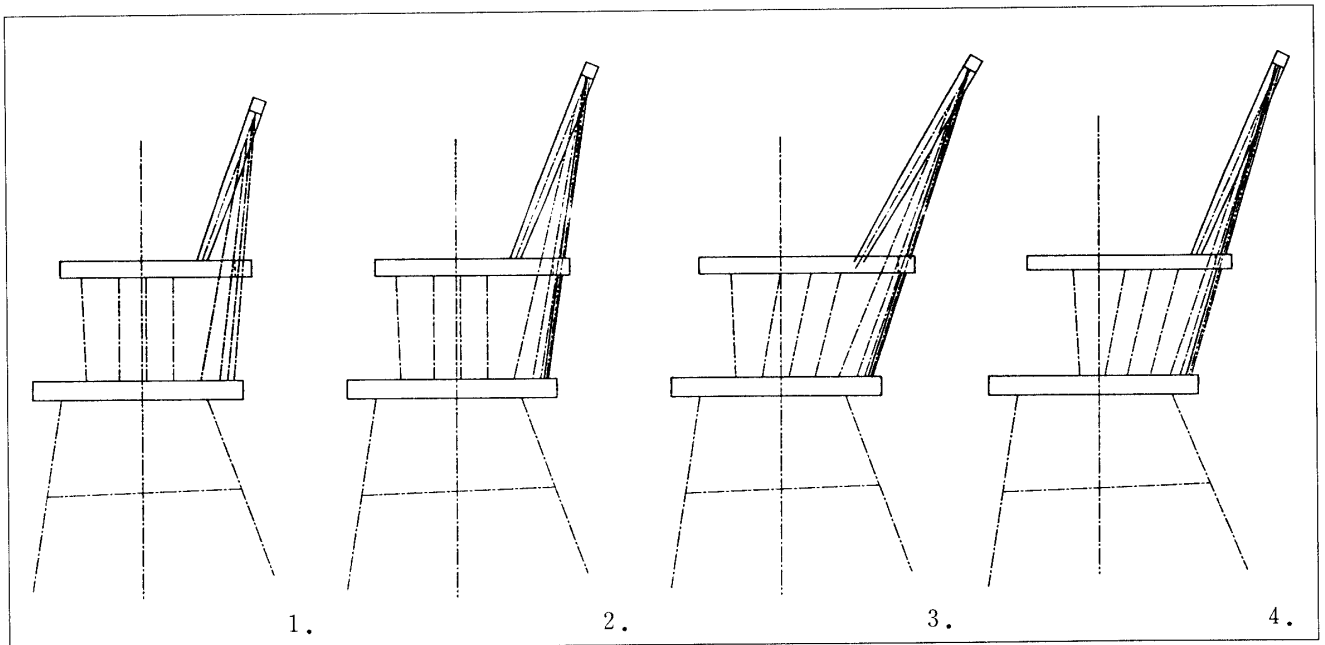


図11 スピンドル，スプラット傾斜の変化

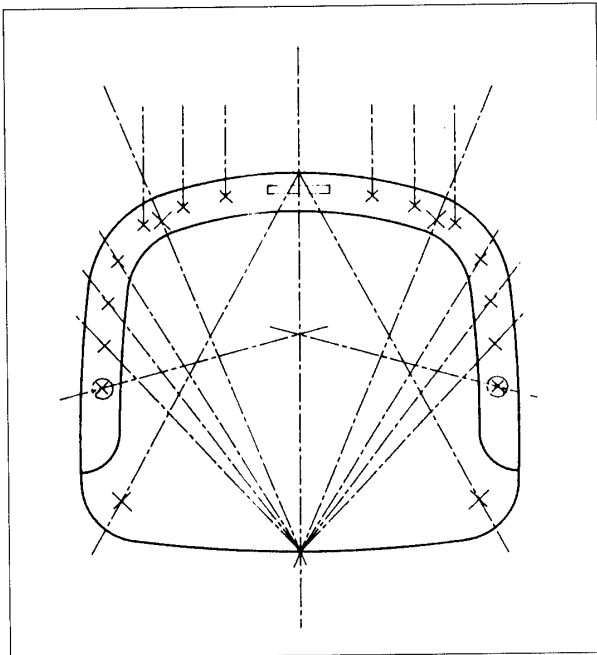


図16 最終決定した座面の形態

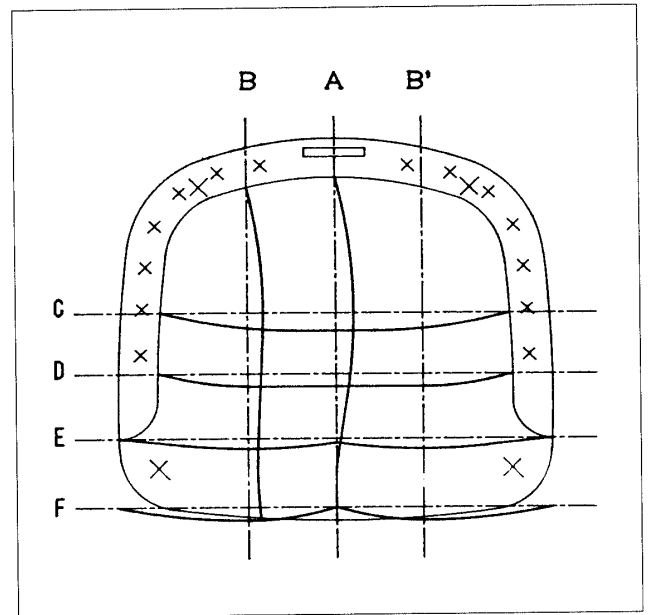


図18 座面凹面形状の軸線図

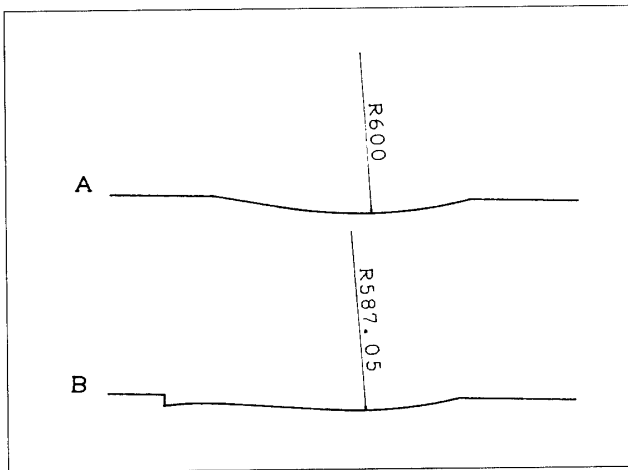


図17 アズによる削り角度から推察された半径

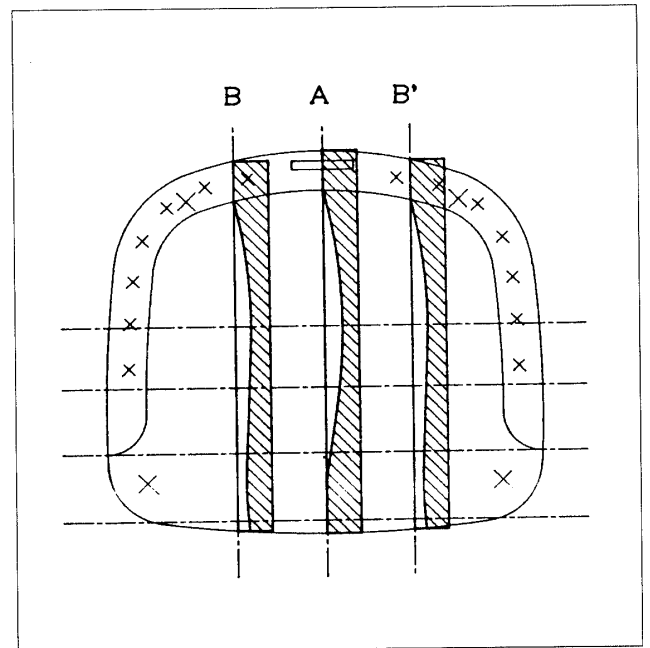


図19 座面凹面形状の各断面

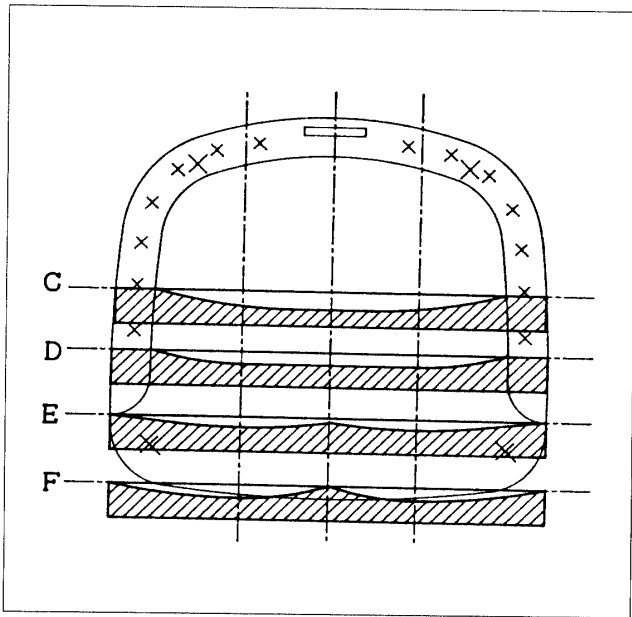


図20 座面凹面形状の各断面

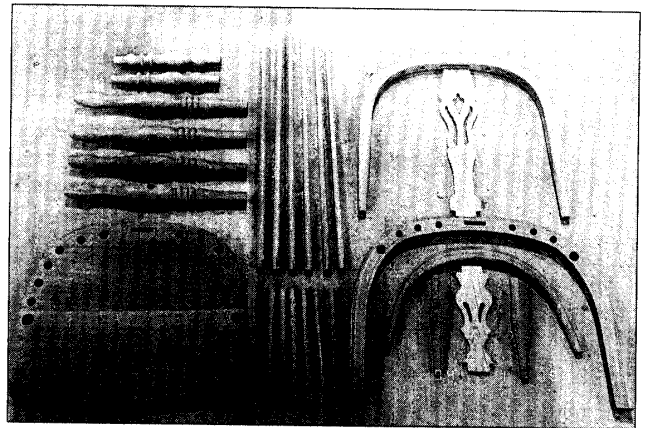


写真2 部品, 1993年度

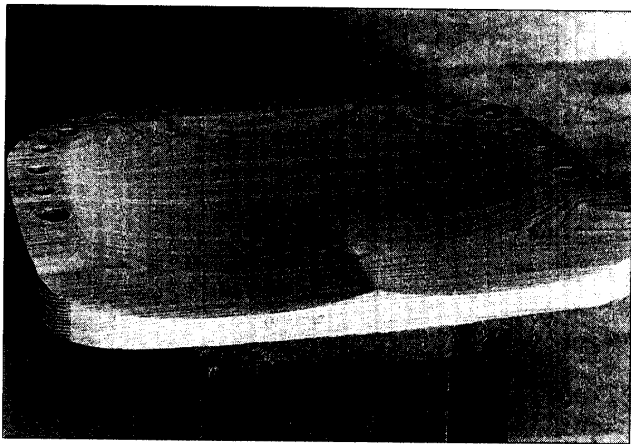


写真1 座面の完成, 1995年度

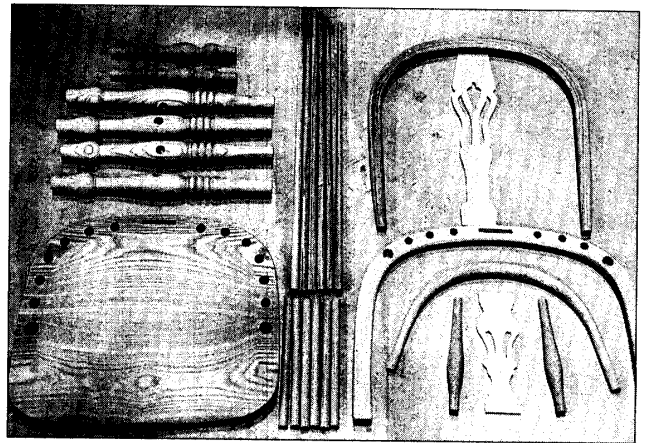


写真3 部品, 1995年度

【終わりに】

何百年に及ぶウインザーチェアの形態の形成の時間を考えた時、それを掌握し得るには膨大な時間と経験が必要であり、おそらく不可能なことのように思える。しかしCADの導入による図面作成に要する時間の短縮の効果は絶大なるものであった。コンピューターを使用するからには実際の作図の過程と異なるのは確かであるが、現在使用のソフト(CADRUN)による作図は途中を省略し

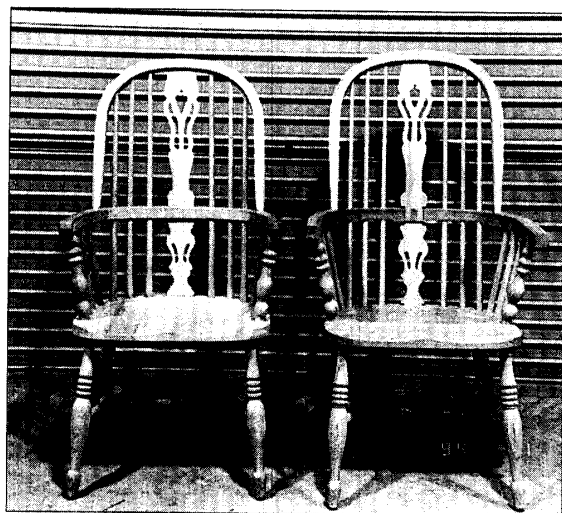


写真4 正面, 1993年度



写真5 側面, 1993年度

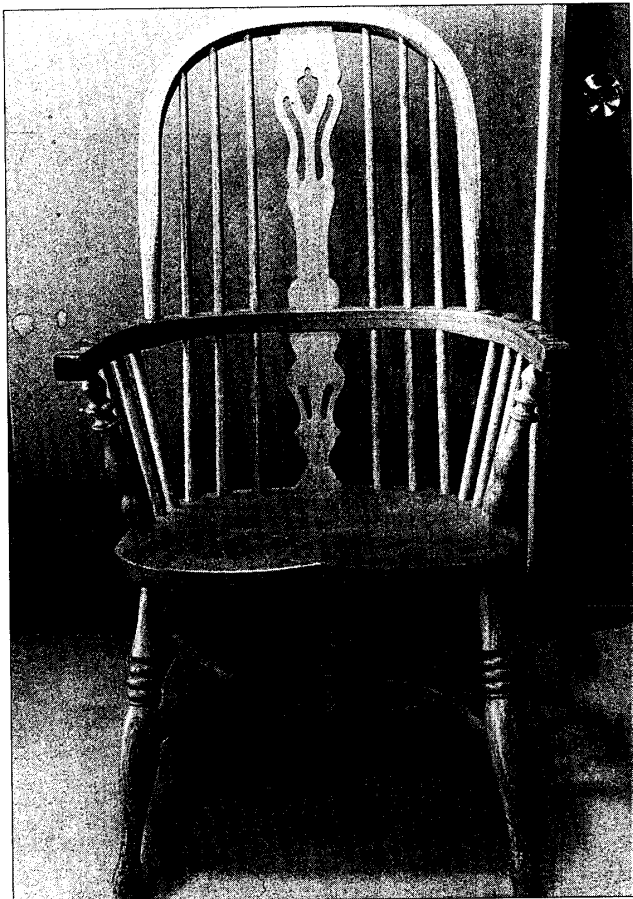


写真6 ボウバックチェアー正面, 1993年度

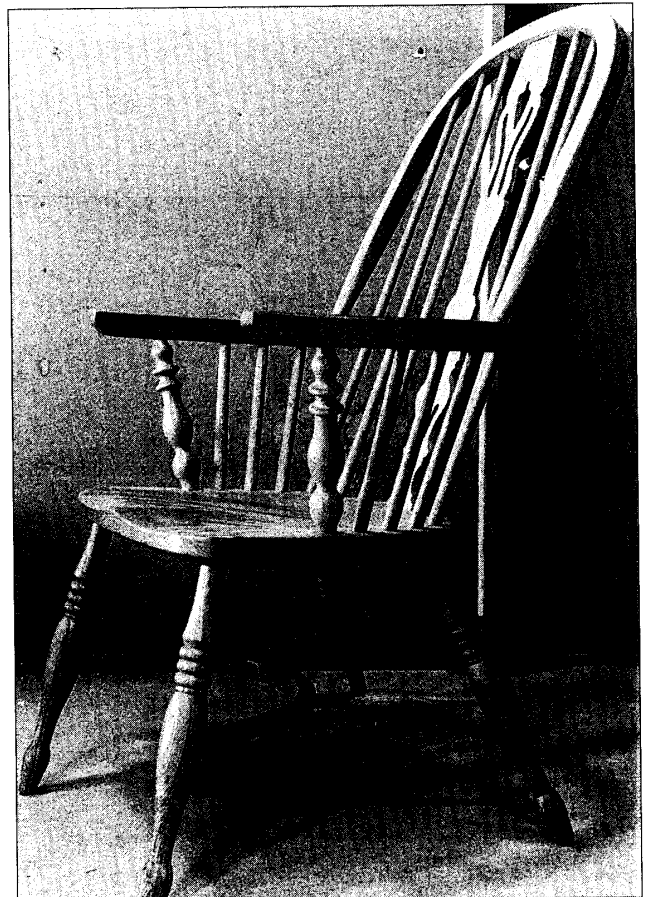


写真7 ボウバックチェアー側面, 1993年度

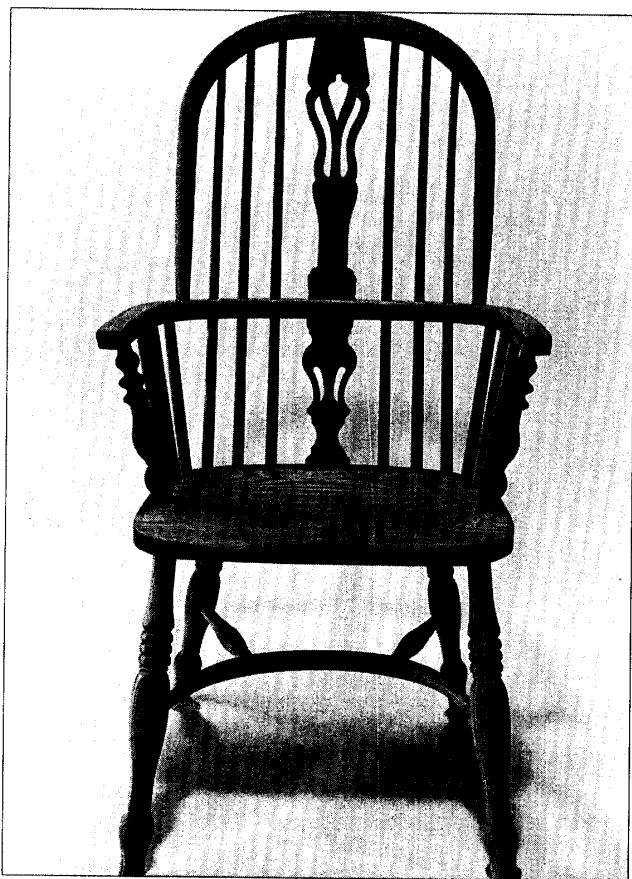


写真8 1995年度完成品正面

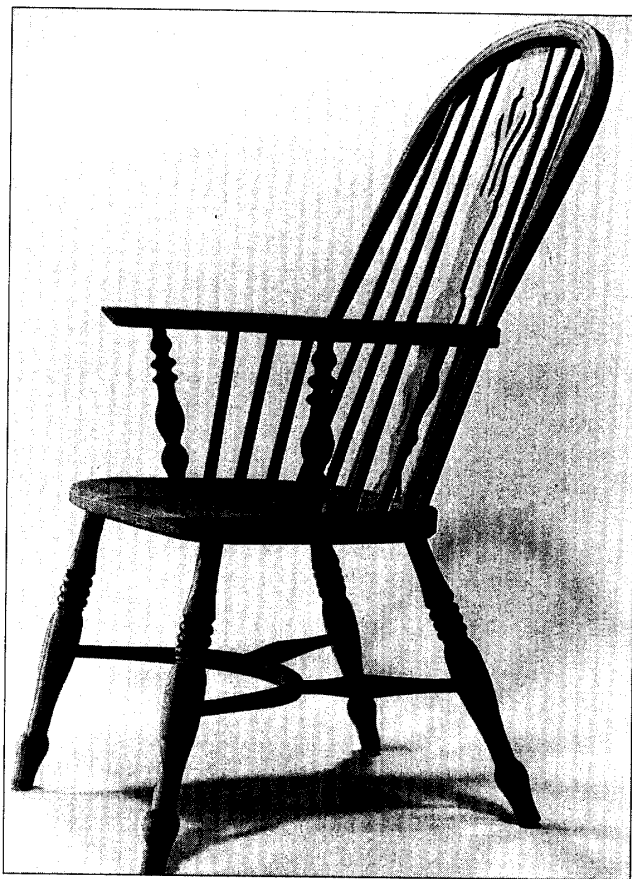


写真9 1995年度完成品側面

たり、欠如させるのではなく同じ作図の過程を通った上で、その時間を短縮させる効果があるのである。実はそこに意味があるのであって、教育効果を期待する意味からしても、ただ時単をはたして効率を上げるといったたぐいのものとは区別しなければならないのは自明のことであった。もちろん制作技術に費やす時間も膨大なものではあるが、実は制作の時間よりも確実な形態を作図するまでの時間の方がはるかに永いのである。それがスムーズに行って始めて制作に入れるのである。そのことが作図の技術をマスターすることにつながるし、同時に期待以上の効果を上げるための大きな要素となり得るのである。その過程を順序を追うと次のようになる。

1. 実物の歴史資料写真より形態を抽出する。
2. CADにより各種図面を作成する。
3. 1/5あるいは1/3模型の作成。

4. 1/1図面の作成。
5. 試作制作。
6. 試作品の修正あるいは訂正
7. 本制作

実際にはすんなりとこの順序で進むとはかぎらない。各段階で何度も何度もフィードバックが繰り返されることが多いのである。この後実際の資料を実測することによって現実のものと比較検討することも考えられるが、それには実際にイギリスを訪れ、歴史的資料を捜し当てるなどの時間が必要となる。それは今後のテーマとして考えられることである。またコンピューターのスキャナー等による分析方法も考えられるが、前稿でも述べたように、コンピューターという道具を利用して先人の残したものの作りの過程を追体験し、そこから伝わってくるなんらかのメッセージを受け取るとうとするねらいからしても、コンピューターの利

用も過ぎると弊害になる。他の分野のテーマとして考えられるかもしれない。また制作にあたって形態研究を先行させたがために、たとえばエルム（楡）が手に入らなければオーク（櫟）をあて、アッシュ（トネリコ）がどうしても手に入らなければビーチ（ブナ）を使うとか、なるべく当時の木材を手に入れる努力はしたが、時間的、あるいは場所的制約のために、必ずしも資料通りには行かなかった。それは今後の研究教育の進捗状況にゆだねたい。

参 考 文 献

- 池田三四郎, 民芸の家具, (東峰書房, 1973年)
三四郎の椅子, (文化出版局, 1982年)
- 鍵和田務, 月刊インテリアン, 連載西欧家具の歴史講座
57~61, (家具産業出版社 1992年)
英国カントリーファニチャー, (家具保存協会家具の歴史館, 1976年)
- JACK HILL, COUNTRY CHAIR MAKING, (A
David Charles Books, 1993)
- THOMAS CRISPIN, The English WINDSOR
CHAIR, (Alan Sutton Publishing Inc, 1992)
- 山永耕平, 九州産業大学芸術学部研究報告第26巻, イギリス
カントリー・ファニチャー「ウインザーチェア」
の形態研究 そのI, (九州産業大学芸術学会, 1995)